

# 馬英九再選と 台湾の「自己革新」

松田康博

(東京大学東洋文化研究所教授)

Yasuhiro Matsuda

1965年生まれ。慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。博士(法学)。防衛庁防衛研究所主任研究官、在香港日本国総領事館専門調査員、ヘンリー・L・スティムソン・センター客員研究員、台湾綜合研究院第4研究所客員研究員などを経て、現職。専門はアジア政治外交史、中台関係論。著書に『台湾における一党独裁体制の成立』(慶應義塾大学出版会)など。

## 信任された対中融和路線

二〇一二年一月四日、台湾の馬英九総統が再選された。汚職容疑で服役中の陳水扁前総統(二〇〇〇―〇八)は、選挙のため台湾アイデンティティの動員を繰り返し、中国との緊張を高め、米国との関係も悪化させてしまった。しかも、その時期はちょうど中国が経済的にも軍事的にも台頭したタイミングと重なっている。馬英九政権

行使は週五〇〇便以上飛び、中国大陸からの観光客は年間一〇〇万人を超えるようになった。今回は、こうした馬政権の対中融和路線が信任されるかどうかが問われた。

中国国民党(国民党)の馬英九は、最大野党である民主進歩党(民進党)の蔡英文主席を六八九万一一三九票(五一・六〇%)対六〇九万三五七八票(四五・六三%)で下した。親民党の宋楚瑜は三六万九五八八票(二・七七%)にとどまった。総統選挙の投票率は七四・三八%に達し、選挙プロセス全体を通じて大きな混乱もなく、敗者も選挙結果を受け容れた。台湾の民主主義は成熟した高い水準を世界に示した。

今回、立法院(一院制国会に相当)の全面改選も同時に行われ、一一三議席(選挙区七三、先住民枠六、比例三四)の内、それぞれ青陣営の国民党六四、親民党三、それぞれ緑陣営の民進党四〇、台湾團結聯盟三、およびその他三議席となった。この青とは中国や国民党のシンボルカラーであり、緑は台湾や民進党のシンボルカラーである。外省人、客家人、先住民という少数派は青陣営支持に傾いており、多数派の福建系本省人は両陣営に分

とは、いわば陳水扁政権の失敗と中国の台頭が生み出した政権である。馬英九政権は、中国との関係安定化を通じて台湾の経済発展を追求する路線をとった。そして、その路線は米国や日本との関係強化を後盾とすることが前提であった。

つまり、馬英九政権は、中国および米国・日本との良好な関係を同時に追求するという従来まれな目標を設定している政権である。今や中国大陸は、台湾にとって最大の貿易相手・投資先である。馬政権が進めた中台の直裂している。結論として、国民党は単独で安定多数を確保し、馬英九政権は二つの選挙で対中融和路線を信任されたといえることができる。

## 大陸政策で負けた蔡英文と民進党

選挙戦のプロセスを振り返ると、今回初めて総統選挙と立法委員選挙が合併され、一人が三票(総統、立法委員の選挙区と比例区)投票できたことが選挙戦のプロセスを決定したと言える。国民党は親民党との協力や妥協を拒んだため、小政党の親民党は存亡の危機に立たされた。生存を求め、知名度の高い党首の宋楚瑜が総統選に出馬することで、親民党は比例区で議席獲得を目指した。宋はいわゆる「コートテール効果」(便乗効果)を狙った行動にでたのである。

このため青陣営は分裂選挙となり、平素からの馬への不満が宋支持に流れ、一時は蔡が馬の支持率を上回って接戦となった。他方青陣営では馬英九落選の危機感が強まり、宋支持者の約半数が最終盤になってから蔡当選を恐れて馬英九支持に回流する「戦略的投票行動」をとつ